

意志動詞と無意志動詞の研究—その2

杉本和之

(日本語日本事情研究室)

1. 承 前

本稿の前編に当たる「意志動詞と無意志動詞の研究—その1」(『愛媛大学教養部紀要 第28号』)では、意志動詞と無意志動詞の定義については、仁田(1988)の考えに沿って、「自己制御性を持った動詞を意志動詞、それ以外の動詞を無意志動詞」と一応設定しておいて、定義の本格的な検討は避け、意志動詞、無意志動詞と共起する数多くの意志性の表現形式、無意志性の表現形式、並びに副詞類についてその共起の様相を分析・検討した。その共起の様相については、以下の六種に分けた。

- A) 意志動詞と無意志動詞をほぼ完全に区分している。
- B) 原則的には意志動詞と共起する形式だが、無意志動詞もかなり混入している。
- C) 原則的には無意志動詞と共起する形式だが、意志動詞もかなり混入している。
- D) 二種の用法をもち、一方は意志動詞、他方は無意志動詞と共起する形式だが、無意志動詞、意志動詞が反対の領域にかなり混入している。
- E) 意志動詞・無意志動詞との区別なく用いられる。
- F) ある種の意志動詞の無意志化、またはある種の無意志動詞の意志化という特別の機能をもつ。

対象とした意志性の表現形式は、～う/よう、～まい、～う/ようと思う、～(する)つもりだ、～たい、命令形、禁止命令形、～てみる、～ておく、～なければならない/ねばならない、可能形、～て下さい、受給表現、並びに、「わざと」「敢えて」「思い切って」「強引に」「やむをえず」「恐る恐る」の副詞類、そして無意志性の表現形式は、～う/よう、～まい、原因・理由の「～て～」の後件部分、条件を表わす「～ば～」の後件部分、条件を表わす「～と～」の後件部分、～てしまう、並びに、「うっかり(して)」「つい」「知らず知らず」「気がつく」と「思わず」「かっとなって」「咄嗟に」などの副詞類である。

そして、検討の結果、A)に該当する、意志動詞・無意志動詞の区別に使用しうる客観テストの第一候補として、言い切りの形の「～てみる」を得、それを補強する第二候補として、副詞類の「やむをえず」を得た。

本稿では以上の結果を踏まえつつ、意志動詞・無意志動詞に関してより厳密な定義を施し、更に、動詞の意志性・無意志性の中間領域として存在している心的作用の動詞等の解明を行い、最終的には「意志動詞—無意志動詞」の体系の全貌を描き出したい。

2. 意志動詞・無意志動詞の定義

どんな動詞が意志動詞に、どんな動詞が無意志動詞に属するかという区別は、大半の動詞に関しては実はさほど難しい問題ではない。「食べる」「飲む」「歩く」「帰る」「買う」「書く」「読む」「切る」「つかむ」「置く」など、人間の日常的な動作を表わすこれらの動詞は誰が見ても意志動詞であり、逆に「(雨が)降る」「(花が)咲く」「(風が)吹く」「(火)が消える」「(水が)流れる」といった、人間ないしは動物以外を主体とする作用を表わす動詞は必然的に無意志動詞ということになる。宮島(1972)では、意志的動作にもちいられる動詞が意志動詞であると、定義の問題を簡単に片付けている。鈴木(1972)では、くさそいかける形(筆者の「～う/よう」の形に該当)と命令する形を本来の意味(即ち、「話し手があい手に動作をはたらきかける」場合)でもちいれることのできる動詞を意志動詞としてしている。そして「この形(筆者注:くさそいかける形と命令する形)を本来の意味でもちいれることのできる動詞は、人間の意志的な動作(人間の意志によって左右することのできる動作)をあらわす動詞にかざられる」としている。

人間の意志的な動作をあらわす動詞以外に意志動詞がなければ定義はこれで問題がないが、現実には「人間の動作」ではなく、「人間の心的作用」を表わす動詞の中にも意志動詞が存在する可能性が高い。例えば「考える」という動詞は、

(1) テニスの試合の組合せは僕が考えてみる。

(2) 思った通りに行かなかったので、やむをえず別の方法を考えた。

のように、意志動詞としての用法をもつ。他にも人間の心的作用を表わす「覚える(=暗記する)」「注意する(=留意する)」「反省する」「予想する」などの動詞は無意志動詞と容易には断定できない。更に、「だます」「ごまかす」「おどす」「せがむ」のように、動作と心的作用の中間的な意味を表す動詞で、意志動詞と見られるものもいくつか存在する。また、一般に意志動詞とみられている「居る」は動作ではなく状態を表わす。以上のことを考慮すると、「意志的な動作を表す動詞=意志動詞」と簡単には括れない。

先に述べた仁田(1988)の「自己制御性を持った動詞を意志動詞、それ以外の動詞を無意志動詞」という定義では、心的作用を表わす動詞も意志動詞に入り得る。仁田(1988)の記述をもう少し詳しく紹介しよう。仁田は、「命令・禁止と動詞のタイプ」という項で、次のように述べている。

「その動詞が、命令や禁止のモダリティをとりうるのか否かには、その動詞の有している〈自己制御性〉といった意味的な特性が関わっている。自己制御性とは、動きの発生・過程・達成を、動きの主体が自分の意志でもって制御できるといった性質である。自己制御性を持った動詞が、いわゆる意志動詞であり、自己制御性を持たない動詞が、いわゆる無意志動詞である。

自己制御性および命令・禁止に成りうるか否かといったことから、動詞は、少なくとも次のような四種のタイプに分かたれる(もっとも、常に、動詞が截然と次の四種に分かれるとは限らないが)。」

そして、動詞を次の四種に分けている。

1) 達成の命令と達成の禁止とに成りうる動詞: この達成の命令にも達成の禁止にも成りうる動詞は、動きの主体が、動きの発生、過程だけでなく、動きの達成・成立そのものを、自分の意志でもって制御できるといった〈自己制御性〉という意味特性を持った動詞である。「歩く、走

る、食べる、入れる、触る～」など数多くの動詞が属する。

2) 過程の命令には成るが、禁止には成らない動詞：動きの達成・成立そのものは、自己制御の埒外にあるものの、動き達成への過程・企てが、遂行するに望ましい、自己制御可能な動きとして、捉えられ、命令の対象になっているのがこのタイプの動詞である。「落ち着く、(自信)を持つ、(元気)を出す、しっかりする、安心する、思い出す～」など。^(注1)

3) 過程の禁止には成るが、命令には成らない動詞：動きの非実現・非成立そのものは、自己制御の埒外にあるものの、事態の達成への過程・企てが、自己制御可能な動きとして、禁止の対象になっている。「心配する、驚く、慌てる、恐れる、くよくよする、うろろろする～」など。

4) 命令にも禁止にも成らない動詞：動きの主体が、自らの意志でもって、動きの発生・過程・達成をコントロールできないといった〈非自己制御性〉という意味特性を持った動詞である。「困る、分かる」の外に、非人間を動きの主体に取る「開く、閉まる、光る、照る、降る、流れる～」など多数。

「自己制御性、即ち、動きの発生・過程・達成を、動きの主体が自分の意志でもって制御できる」といった性質を持った動詞が、いわゆる意志動詞であり、自己制御性を持たない動詞が、いわゆる無意志動詞である」とする、仁田の定義からみると、上の1)が意志動詞であり、4)が無意志動詞であることは確かであるが、2)3)は意志動詞に入るのか無意志動詞に入るのか判断としない。2)3)は動きの過程に対しては自己制御性を有するが、動きの達成に対しては自己制御性を有しない。仁田(1991 a, b)にも動詞の自己制御性に関する記述はあるが、意志動詞・無意志動詞という用語は登場しない。また上述した仁田(1988)には、確かに心的作用の動詞をも分析の対象とはしているが、筆者が意志動詞の候補として先に挙げた「考える」「覚える」「注意する」「反省する」「予想する」は、1)～4)の語彙リストには取り上げられていない。また、筆者が前稿で無意志動詞として扱った「忘れる」は、仁田の分析では、「過程の命令と過程の禁止に成る動詞」のはずだが、この種の動詞は仁田の分類では1)～4)のいずれにも入らない。

筆者は、意志動詞の範囲を確定する場合、やはり、動詞の示す動作・作用・状態の成立・実現において、主体の意志が機能しているかどうかが決定的なポイントだと考える。動きの過程、即ち、動きの成立・実現の助走段階における主体の意志の機能は副次的な要素に過ぎないと考えている。そして、意志動詞・無意志動詞の定義に関しては、主体の意志が、動詞が示す動作・作用・状態の成立・実現の決定要因となっている動詞を意志動詞とよび、それ以外の動詞を無意志動詞とよびたい。

さて、こうして「動詞の示す動作・作用・状態の成立・実現」に焦点を絞ると、今度は動作・作用・状態の成立・実現において主体の意志が機能していることをいかにして検証するかという問題が残る。命令形・禁止命令形を形成できるかどうか、及び、命令形・禁止命令形の意味(達成の命令か過程の命令か)の検討もその一つの方法ではあろうが、命令形・禁止命令形は本来、動作・作用・状態の主体の側の表現ではなく、主体に対して外から強制・要求する側の表現である。又、意向形(意志形)による誘いかけも、厳密に言えば分割された複数主体の表現であって、端的に動作・作用・状態の単独主体の意志を析出できるものではない。動詞の表す動作・作用・状態の成立・実現において、主体の意志が機能しているかどうかを、最も直截的に表示しうる形式は「私は(が)～します(～してみます)」という、実行・成就を約束する意思表示の表現である。しかもこの場合、特定の時点・期間が明示される必要がある。時点・期間を無視、ないし

は曖昧にしたままでは、意思表示の表現とは言えない。例えば、

(3) ? (私は) そのうちこのことを忘れます。

(4) ? (私は) いつかこのことを忘れます。

のような文は意思表示の文ではなく、成立するとすれば蓋然性を表す推量の文に過ぎない。従って(3)(4)からは「忘れる」という作用の成立において主体の意志を析出できない。即ち、「忘れる」が意志動詞であると断定できないという結論が導き出される。

もし、特定の時点(成立時点或いは期限)、ないしは期間(起点か終点のみでも可)を明示する語句とともに使用できれば、「忘れる」は意志動詞であるということになる(以下、*印は非文法的な文であることを示す)。例えば、

(5) * (私は) そのことは明日忘れます／忘れてみます。

(6) * (私は) このことは、今度あなたに会うまでに忘れます／忘れてみます。

(7) * (私は) このことを今から8時まで忘れます／忘れてみます。

の、いずれか一つでも成立すれば意志動詞だと言える。

これまで意志動詞として扱ってきた動詞群はいずれも特定の時点、ないしは期間を明示する語句とともに使用して、意思表示の文を形成することができる。なおこの際、「分かりました。それじゃ」という表現の後に続く形にすると、意思表示の文であることがより鮮明になる。

(8) 分かりました。それじゃ私は明日からここで働きます。

(9) 分かりました。それじゃ私は6時に出かけます。

(10) 武田君には(私が) 今日中に知らせます。

(11) それじゃ、(私が) すぐ窓を開けます。

(12) (私は) 今から3時まで仕事をさぼります。

(13) 来週の計画は(私が) 今から考えます。

意志動詞とは見なされながらも「～てみる」の語用論上の制約から、「～てみる」との共起が難しかった「自殺する」「死ぬ(自死の意の場合)」「決める」「居る」も同じ結果が得られる。

(14) 分かりました。それじゃ私は明日自殺します。

(15) それじゃ私は今から毒薬を飲んで死にます。

(16) 分かりました。それじゃ(私が) すぐ決めます。

(17) それじゃ(私は) 午後ずっとこの部屋に居ます。

逆にこれまで無意志動詞として扱ってきた動詞群は特定の時点、ないしは期間を明示する語句とともに使用して、意思表示の文を形成することができない。

(14) * 分かりました。(私は) 面接試験が始まるまでに落ち着きます／落ち着いてみます。

(15) * それじゃ私は今から安心します／安心してみます。

(16) * 分かりました。それじゃ私は明日困ります／困ってみます。

(17) * それじゃ(私は) これから3か月間彼のことを理解します／理解してみます。

(18) * それじゃ(私は) 妹が帰って来るまで妹のことを心配します／心配してみます。

以上、意志動詞と無意志動詞の定義について述べたが、長くなったので要約しておく。意志動詞と無意志動詞の区別については、主体の意志が、動詞が示す動作・作用・状態の成立・実現の決定要因となっている動詞を意志動詞とよび、それ以外の動詞を無意志動詞とよぶ。そして、動作・作用・状態の成立・実現における主体の意志の機能の有無は、その動作・作用・状態の成立・実現に関する特定の時点、ないしは期間が明示された、「私は(が)～します(～してみま

す)」という意思表示の文の成立如何によって検証される。

3. 心的作用を表わす動詞

以上で明らかになったように、意志動詞と無意志動詞の判定において最大の問題として残っているのが、心的作用を表わす動詞の扱いである。このグループに属する動詞はかなり多いが、基本的な動詞を中心にして、これを次の二つに分けて考えてみよう。

a) 知覚・思考等を表す動詞

見える, 聞こえる, 分かる, 感じる, 知る, 理解する, 誤解する, ~気がする, 気になる, 気にする, 気がつく, 思う, 考える, 注意する, 反省する, 想像する, 予想する, 忘れる, 思い出す, 諦める, 信じる, 決める

b) 感情を伴う動詞

楽しむ, 好む, 愛する, 慕う, 感心する, 感動する, 喜ぶ, 憧れる, 望む, 願う, 期待する, 惜しむ, 同情する, 安心する, 落ち着く, くつろぐ, 許す, 感謝する, 尊敬する, 驚く, 感激する, 心配する, 疑う, 悩む, 迷う, ためらう, 動揺する, 困る, 恥じる, がっかりする, あきれれる, 嫉妬する, 後悔する, 悲しむ, 飽きる, 腹を立てる, 恨む, 呪う

厳密に言えば、「心的作用を表わす動詞」と見なされる動詞は実際にはこの倍以上リスト・アップできようが、例えば、「予想する」に対して「予測する」「予見する」「見込む」等、同義語・類義語がかなり数多く想定され、意志動詞・無意志動詞の判定作業が量的に繁雑になる可能性がある。それを避けるため、使用頻度の高い基本的な動詞に絞って考察することにした。

さて、これらの動詞の、意志性を中心とした意味を考える場合、まず問題になるのは、個々の動詞の多義性ということである。とりわけ、「心的作用を表わす動詞」と言いながら、これらの動詞が外的動作を表す場合があるということである。例えば、「決める」は個人の内的な決断を表わす場合の他に、集団討議による意思決定行為を表す場合がある。「許す」も個人の内的な心的作用の他に集団・組織の許認可行為や個人による対人的な言語を使用した許可行為を表わしうる。「惜しむ」も個人の心的状態の他に、節約行為も表わしうる。いずれの場合も後者の用法では「心的作用」ではなく外的動作を表す意志動詞ということになる。そうして意味の上で外的動作の要素が大きければ、その動詞は「心的作用を表す動詞」の範疇から外さなければならない。「笑う」はb)感情を伴う動詞のグループに十分入りうる動詞であるが、外的動作が必須の構成要件になっていることから、範疇外とした。「泣く」「怒る」も同様である。もっとも「笑う」「泣く」「怒る」は、外的動作といっても基本的には内的感情に誘発された動作であるので、後で紹介する、心理的動作を表す動詞に入れる。又、意味上「考える」の延長線上にある「立案する」「企画する」は、考えた結果を案として提出するという外的な行為が伴うので、これも動作動詞の範疇に入れる。

外に心的作用を表す動詞と類縁関係をもつ動詞群として、次節で紹介する主体の心的態度を表す動詞のグループがある。「我慢する」「頑張る」「没頭する」などの一般的な態度を表すものと、「甘える」「なめる」「脅す」などの対人的な態度を示すものがある。

以上、ここで「心的作用を表す動詞」として扱うのは、個々の動詞の多義性を考慮しつつも、その基本的な意味が、個人の内面で生起する精神的な作用を表示するものであることを確認して

おく。

さて、心的作用を表す動詞の意志性を検討する上で、更にもう一つ大きな困難が存在している。それは、心的作用を表す動詞の場合、同じ意味・用法でありながら、意志的発動と無意志的発動が両方とも起こり得る可能性があることである。分かり易い例として、心的作用を表す動詞と類縁関係にある「生理的動作・作用の動詞」の「瞬きをする」を考えてみよう。我々人間は「瞬きをする」という動作を、意志によって実現させることができる。しかし、当然のことながら、「瞬きをする」という動作（作用）は、意志によってのみ発動するわけではない。意志的発動と無意志的発動の両方がありうるのである。これと同じことが、心的作用を表す動詞の場合、「考える」「想像する」等の動詞において発生する。従って、ある心的作用を表す動詞において、意志的発動の具体例が検証しえたとしても、その事実から自動的にその動詞が意志動詞だとは断定できない。即ち、意志動詞・無意志動詞両用の可能性が残るのである。そのため、意志動詞だとの判定を下すためには、意志的発動を証明すると同時に、無意志的発動の可能性がないことを明らかにしなければならない。具体的には、その作用を一定期間（例えば1日間）停止できるかどうかという検討が必要である。一定期間停止できれば、無意志的発動の可能性がないということになり、無意志動詞としての可能性はなくなる。停止できなければ無意志的発動の可能性があるとということで、無意志動詞としての可能性が残るとことになる。この検討作業（「作用の停止」と呼ぼう）は、言語的には、「～

（する）のをやめる」「～しないことにする」「～しないでおく」等の文の文法的、語用論的成立の如何による。

表1は心的作用を表す動詞のうち、意志動詞の可能性のあるものとして、「考える、覚える、疑う、反省する、期待する、想像する、予想する、諦める、注意する、愛する、信じる、決める」を掲げ、他に代表的な無意志動詞として「困る、感じる、見える、わかる、憧れる、忘れる、喜ぶ、落ち着く、思い出す、思う、考える、覚える、疑う、反省する、期待する、想像する、予想する、諦める、注意する、愛する、信じる、決める」を掲げた。「～てみる」は「～てみる。／～てみた。」の言い切りの

表1. 心的作用を表わす動詞の意志性

	～てみる	やむをえず～	私は～します ～してみます (意思表示)	作用の停止
食べる	○	○	○	○
歩く	○	○	○	○
困る	×	×	×	×
感じる	×	×	×	×
見える	×	×	×	×
わかる	×	×	×	×
憧れる	×	×	×	×
忘れる	×	×	×	×
喜ぶ	×	×	×	×
落ち着く	×	×	×	×
思い出す	△	×	×	×
思う	△	×	×	×
考える	○	○	○	×
覚える	○×	○×	○×	○×
疑う	△	○	△	×
反省する	○	×	○	×
期待する	○	○	○	×
想像する	○	×	○	×
予想する	○	×	○	○
諦める	×	○	△	×
注意する	○	△	○	○
愛する	△	×	×	×
信じる	△	×	×	×
決める	△	○	○	○

形のみが対象となる。「私は～します（～してみます）」は特定の時点・期間が明示された意思表示の文で、「私が～します（～してみます）」でもよい。「作用の停止」は前述したように、「～（する）のをやめる」「～しないことにする」「～しないでおく」等の文の成立・不成立に関する検討である。以上の手続きにより、最終的に意志動詞・無意志動詞の判定を下す。なお、ここに挙げた心的作用を表わす動詞の中で、外的動作の用法をもつ場合は、その用法は考察の対象外とする。

心的作用を表す動詞は、あくまで個人の内面で生起する動詞であるため、目に見える、耳に聞こえる形の外的動作・作用の動詞に比べると、その動きが微妙で捉えにくい。又、一動詞中の用法の差も微妙で判別がかなり難しい。以下、個々の動詞で問題となりうるものについて若干の解説を加える。

先ず「思う」は心的作用を表す動詞の代表格のような語であるが、逆に文法的には非常に制約の多い語で、「今から／明日思います。」「2時間思います／思ってみます。」が成立しないこと、「思え。」「思うな。」という一語文の命令文、禁止命令文が成立しないことから明らかなように、我々人間は「思う」という作用自体を制御することはできないということになる。即ち、「思う」という作用を意志によって停止したり、発動したりはできない。「思う」は言語的には通常「～と思う。」の形で、内的言語の披露・紹介という機能を果たし、場合によってはこの形式で主体の意見を表示することもできるが、「思う」という作用の成立は我々の制御の埒外にある。従って「思う」は無意志動詞ということになる。

次に「考える」は「これから考えます。」「1時間考えます。」と意思表示の文が簡単に形成できることから意志動詞としての要件を備えていると言える。「考える」は、大局的に見れば、「作る」「書く」「運ぶ」などの身体的作業と同レベルの精神的作業を表わす動詞と見なしうる。即ち、必要に応じて、いかなる時点でも意志によって発動できる精神的行為を表わす。但し、逆に「考える」という作用は意志によってのみ発現するかというと、そうとは限らない。我々人間は、外的刺激を受けて、「どうしたんだろう。」「何があったんだろう。」と自然に考え始める。「そのことについてはしばらく考えないことにする。」のように、特定の対象については作用の停止ができるが、考えることそれ自体を停止することは困難である。このように「考える」は一方で無意志的用法をもつ。結局、「考える」は意志動詞・無意志動詞両方の用法をもつが、基本的には意志動詞だとしておく。

「覚える」は「朝夕寒さを覚える。（＝感じる）」「去年見たあの映画のストーリーは少し覚えている。（＝記憶する）」のように無意志動詞の用法をもつ一方、「暗記する」の意で「今から英単語を20覚えます。」のような意志動詞の用法がある。これは「考える」と同じく精神的作業を表わす純然たる意志動詞である。

「注意する」は対象外の「失敗を重ねた鈴木君にきつく注意した。（＝叱責した）」のような外的動作の他に、「留意する」の意の心的作用を表わす用法がある。後者の場合、「～てみる」とは共起しやすいが、意識的集中を示す「注意する」は、気乗りのなさを示す「やむをえず～」とは語用論的に共起しにくい傾向がある。「今日の試合では相手投手の配球に注意します。」「これからはRの発音に注意してみます。」のように意思表示の文の形成も可能で、又、作用の無意志的発動は考えにくい。以上のことから意志動詞として認定できる。

「決める」の心的作用を表わす用法は、個人の決意・決断を示す。前稿でも触れておいたが、「決める」という決定を表わす語は、暫定的措置を示す「～てみる」とは語用論上共起しにくいという特徴があるが、他の条件では「友人に再三依頼されて、やむをえずローンの保証人になる

ことを決めた。」「ちょっと待って下さい。どっちにするか今日中に決めますから。」のように問題は無い。考えてみるに、意志を伴わぬ決意・決断などはありうるはずがなく、「決める」は当然のことながら意志動詞の範疇に入る。

「反省する」は「昨夜自分のプレイをもう一度反省してみた。」のように、「～てみる」とは容易に共起する。しかし、本来自主的な行為であるはずの「反省する」は不承不承のニュアンスをもつ「やむをえず～」とは語用論上共起しにくい。意思表示の文は「今晚家へ帰って自分のやったことを反省してみます。」のように可能である。以上のことから一種の精神的作業ともいえる「反省する」は基本的には意志動詞の範疇に入るが、他者の言動に刺激を受けて反射的に「反省する」場合もありうるので、この場合は無意志動詞とする。

「期待する」は「私はしっかり者の次男に期待してみた。」「ベテラン投手陣がみな調子を崩したので、やむをえず若手の奮起に期待した。」「私は今場所は魁皇の大関取りに期待します。」のように十分意志動詞としての要件を備えている。「期待する」は「願う」「望む」と同じく感情に根ざす作用を表わす動詞には違いないが、通常は「願う」「望む」ほど切実な願望ではなく、従ってその願望の対象に心理的に依存することも少なく、かなりドライにその対象、並びにその願望期間を主体がコントロールできる。もちろん場合によっては切実な願望を表わすこともあるので、その時は無意志動詞とし、原則的には意志動詞と見なしてよいだろう。

「想像する」は「私は勝手に社長の家庭生活を想像してみた。」のように「～てみる」との共起は容易だが、「やむをえず～」との共起は難しい。恐らくは、自主的に「想像する」場合はかなりの意識の集中が必要で、そのため「やむをえず」の語性とマッチしないのであろう。意思表示の文は「じゃ今ちょっといろいろな場面を想像してみます。」と一応可能である。「想像する」は語の性格上「考える」の延長上にあるものと見なせるが、さほどコントロールの効く作用でもない。又「想像する」能力は個人によって大きな隔りがあるものと思われる。逆に何らかの外的刺激を受けて発動する場合も多い。判定が難しいが一応意志動詞・無意志動詞両用の語としておく。

「予想する」は「想像する」と同様の理由で、「～てみる」との共起は容易だが、「やむをえず～」との共起は難しい。但し、意味上「想像する」ほどの荒唐無稽さはない。事柄の成り行き、過去のいきさつを踏まえてのかなり理性的な判断である。意思表示の文も「では今からちょっと明日のレースの展開を予想してみます。」のように可能で、「考える」と同じく、一種の精神的作業を表わす。意志なくしての予想行為は考えられず、純然たる意志動詞である。

「諦める」は前稿では無意志動詞として扱ったが、意志動詞としての用法もある。「諦める」という行為（ないしは現象）は本来的には感情に深く根ざしている場合が多く、意志による決断というより、無力感・絶望感から自然に諦めた状態になったり、逆に口では「諦めた」と言いながら、内心では諦め切れていないこともあり、かなり複雑な様相を呈する。意志動詞と容易に判定できない。しかし、それも対象次第では簡単な意志的決定で成立する場合がある。「今日の昼飯は田村君とそばを食べようと思っていたが、急の来客で諦めた。」「子供たちが歌番組を見たいというので、サッカー中継を見るのを諦める。」のように願望自体が日常的な些細なものの場合である。そして、意志動詞の用法の場合も「～てみる」との共起は、「決める」の場合と同様の理由で、語用論的に難しい。「やむをえず～」との共起は容易である。意思表示の文は「それじゃ、その件は今ここでさっぱり諦めます。」のように何とか可能である。以上まとめると、「諦める」は基本的には無意志動詞だが、意志動詞の用法も認めることにする。

「疑う」は「やむをえず～」との共起は容易である。「～てみる」との共起においては、「彼がやったのではないかと疑ってみた。」のように、過去形「～てみた。」の形が中心で、未来時制の「～てみる。／～てみます。」はかなり難しい。「疑う」の基本的な用法は「私は彼女の常識を疑う。」「彼はまた欠席するのではないかと疑う。」のように、現在形で現在の心中に自然に生起している疑念を紹介するものである。これは完全に無意志動詞の用法である。一方、「相手に疑念をかける」「相手を疑念をもって扱う」というニュアンスが入れば意志動詞としての性格が出てくる。「これからも、あの容疑者の行動を徹底的に疑ってみます。」となると、意志表明の文も辛うじて成立する。以上を要約してみると、やはり「疑う」は基本的には無意志動詞で、部分的に意志動詞の用法をもつとするのが妥当なところだろう。

「愛する」は「～てみる」「やむをえず～」とも共起は困難である。意志表明の文も成立が難しい。にも拘らず、意志動詞の可能性があると考えるのは、「私はこれまであの人を命懸けで愛してきました。」或いは「愛し通す」「愛し抜く」のように、強い意志集中を示す文・表現が成立するからである。「愛する」という作用は言うまでもなくその発端においては、対象に対して自然に強く心が惹かれるという事態が伴う。場合によっては自分自身が「愛している」ことに気づかないこともある。この点を捉えれば、「愛する」は当然無意志動詞ということになる。ところが「愛する」という作用自体は、類義語たる「好きになる」とは違って、瞬間的な心のありかたを表示するのではなく、むしろその持続に重点が置かれる。従って、「愛する」という作用の成立・実現は発端と同時にその後の持続の過程をも考慮に入れなければならない。発端・開始の時点では無意志、持続の過程では意志的作用という複雑な場合がありうるのである。但し、「愛します。」と意思表明されたとしても、「愛する」という作用が感情に依拠している限り、持続の過程が意志によって常に確実に保証されるというものでない。以上のことから総合的に判断すれば、やはり「愛する」は基本的には無意志動詞で、意志的な持続の過程と見られる部分に関しては、心的作用としてではなく、対人（或いは一般的な）態度の現れとして別扱いとする。

「信じる」も「～てみる」「やむをえず～」との共起はかなり難しい。「あまり真剣に話をするので、その時は高橋君のことを信じてみた。」と辛うじて成立する場合があるが、一時的に疑念を押さえるという消極的な用法である。本来「信じる」という作用は、主体が時と場合に応じて自由に発動したり、停止したりできるようなものではない。「信じる」は基本的には「愛する」に近い語性を持ち、発端・開始の段階では無意志的作用であるが、その後の持続の過程で「命懸けで神を信じる。」或いは「信じ通す」「信じ抜く」のような強い意志表現が可能となる。結局「愛する」同様、基本的には無意志動詞で、意志的な持続の過程と見られる部分に関しては、対人（或いは一般的な）態度の現れとして別扱いとする。

以上、長くなったので要約しておこう。心的作用を表わす動詞は次のように分類される。

- 1) 無条件に意志動詞と呼べるもの：覚える（暗記する、の意）、注意する（留意する、の意）、決める、予想する
- 2) 基本的には意志動詞と見なせるもの：考える、反省する、期待する
- 3) 意志動詞・無意志動詞両用の動詞：想像する
- 4) 基本的には無意志動詞だが、部分的に意志動詞の用法が認められるもの：諦める、疑う
- 5) 無条件に無意志動詞と呼べるもの：困る、感じる、思う、忘れる他多数。

心的作用を表わす動詞の大半は無意志動詞に分類される。知覚を表わす動詞、並びに感情によ

って発動される動詞はほとんど無意志動詞になる。逆に知的な一種の精神的作業と見られる動詞、並びに意識の集中によってもたらされる作用を表わす動詞は意志動詞になりやすいという傾向が見られる。なお、心的作用を表わす動詞の分類については、「作用の停止」という検討作業を追加したが、外的動作を表す動詞に関しては、動きの内容が明確なため不必要だと考える。一般の外的動作を表す動詞においても、前稿で述べた「無意志化」のように無意志的発動が見られなくてもないが、それは、人間が正常な精神状態から外れた場合に起きる現象であって、心的作用を表わす動詞と同列に扱う必要はない。

4. その他の問題となる動詞群

日本語の動詞を意志動詞と無意志動詞に分類する場合、最大の問題となるのが心的作用を表わす動詞の扱いであったが、この他にも、人間主体でありながら無意志動詞となったり、或いは意味によって意志動詞と無意志動詞に分かれたりといった不規則な動詞群がいくつか存在している。以下、分類において問題となる動詞を、各グループに分けて検討する。

4-1. 主体が分かれる動詞

動作・作用の主体として、人の場合と物・事の場合の両方可能な動詞の例である。主体が人であれば意志動詞、物・事であれば無意志動詞となる。原則として自動詞で、前者の場合は人の動作、後者の場合は、自然現象・社会的現象・物理的現象を表わす。

太郎が部屋に入る（意）－思わぬ金が入る（無）、太郎が仲間から抜ける（意）－とげが抜ける（無）、太郎が橋を渡る（意）－証拠が警察の手に渡る（無）、希望者が受付の前に並ぶ（意）－雑誌が店頭に並ぶ（無）、太郎が銀行の前を左に曲がる（意）－おばあさんの腰が曲がる（無）、歩いていた太郎が急に止まる（意）－扇風機が静かに止まる（無）、太郎が隣の席に移る（意）－季節が移る（無）など。他にも「出る」「触れる」「あがる」「さがる」「下る」「回る」「別れる」「動く」「通る」等かなりある。

また、一見して動作動詞・意志動詞と見られる「行く」の場合でも、子細に検討すると、太郎は横浜へ行く（意）－この電車は横浜へ行く（無）、この計画はうまく行く（無）のように分化している例がいくつも見られる。

4-2. 評価を伴う動詞

「成功する」「優勝する」「合格する」「当選する」などの成立・実現は客観的な評価によるもので、その結果に至るまでの主体の意志的努力の如何に拘らず、最終的には主体の意志・自己制御性の域外にあり、無意志動詞ということになる。この種のものとしては他に、「勝つ」「負ける」「入賞する」「メダルをとる」「活躍する」などがある。ちなみに自己制御性という点からすれば、「勝つ」より「負ける」方が実現は容易である。但し、人は一般に「負ける」ことより「勝つ」ことを目指して努力するわけで、主体の意志・自己制御性の結果「負ける」ことは例外的と見なす。他には「着く」もこのグループの動詞と考えていいだろう。「行く」「来る」「帰る」「渡る」と同類の移動の意志動詞と考えられがちだが、「明日は6時に東京に着こうと思います。」が成立しないことから明らかのように、結果が問題となる純然たる無意志動詞である。

4-3. 無意識・不注意による動作を表す動詞

人の不注意による動作で、不本意な結果を招く動詞である。「転ぶ」「つまづく」「失くす」「倒れる」「落とす」「ぶつかる」「汚す」「壊す」「破る」「滑る」「足をすべらす」などが入る。無意志動詞で、不本意な結果を表わすわけであるから、これらは全て「～てしまう」と共起する。但し、この内、「壊す」「破る」は無意識的行動ではなく、意識して積極的に行う場合が多いので、無意志動詞というより意志動詞の印象が強い。「滑る」もスキー、スケートの場合は意志動詞である。「落とす」も意志動詞・無意志動詞の両面がある。「落とし物」の場合と、無意識による落下の場合は無意志動詞である。「ぶつかる」も両面あり、意識的な体当たりなどは意志動詞である。「転ぶ」「つまづく」「失くす」「倒れる」「足をすべらす」は通常無意志動詞である。「倒れる」は危難を避けるための意識的な転倒であれば意志動詞となる。「転ぶ」「つまづく」「足をすべらす」は、演技でなければ意志的な行為は考えにくい。

4-4. 生理的動作・作用を表す動詞

「瞬きをする」「息をする（吸う／吐く）」「咳をする」「くしゃみをする」「あくびをする」「伸びをする」「嘔吐する」「寝返りをうつ」「痙攣する」「疲れる」「しびれる」「(酒)に酔う」「目を回す」「(寒さに)震える」などはいずれも、人間の自動的な身体的機能によるもので、基本的には全て無意志動詞である。しかしこの内、「瞬きをする」「息をする（吸う／吐く）」「咳をする」「くしゃみをする」「あくびをする」「伸びをする」などは意識的にも行える。特に「瞬きをする」「息をする（吸う／吐く）」は、他の四つが見せかけの演技に近いものであるのに対して、意識的に行った場合と、無意識的になされた場合とで実質上全く差がない。従ってこの二つは意志動詞、無意志動詞兼用と見なしてよい。

「起きる」「寝る」「眠る」「目を覚ます」もこのグループに入る。このうち、「目が覚めた後、布団から出る」の意の「起きる」、「睡眠のために布団に入る」の意の「寝る」は単なる外的動作を表わし、意志動詞である。他の用法の場合は無意志動詞である。

4-5. 心理的動作を表わす動詞

前節で紹介した、心的作用を表わす動詞の類縁に当たる、「泣く」「笑う」「怒る」等の動詞群である。感情に誘発されてそれが外的動作として具現するものである。基本的には無意志動詞であるが、主体は意識的にその外的動作を模倣的に発動することもできる。この場合は意志動詞となる。

4-6. 一般的態度或いは対人態度を示す動詞

これも心的作用を表わす動詞と類縁性をもつもので、外的な現象として現れるが、感情その他の心理的な要素を常に随伴する。一般的態度を表わすものとしては、「我慢する」「努力する」「頑張る」「没頭する」「怠ける」「サボる」(以上意志動詞)、「あわてる」「白ける」「無気になる」(以上無意志動詞)など、対人態度を示すものとしては、「せがむ」「なめる」「おどす」「騙す」「無視する」(以上意志動詞)、「歓迎する」「甘える」「ふてくされる」(以上意志、無意志兼用)などがある。以上、4-5. 4-6. とともに心的作用を表わす動詞と外的動作を表わす動詞との中間領域にある動詞と言えよう。

4-7. 状態動詞

「ある」「居る」「要る」「(形容詞+) 過ぎる」などのグループである。この内、既に紹介したが、「居る」のみは意志動詞の範疇に入る。「～てみる」との共起はやや苦しいが「様子を見るため、しばらくあの部屋に居てみた。」と、一応可能である。「やむをえず～」とも、「今日は小遣いが切れたので、やむをえず一日中家に居た。」など容易に共起が可能である。意思表示の文も「分かりました。それじゃ明日は5時まで事務所に居ます。」のように簡単に成立する。しかし本来意志性の契機を含まぬはずの「状態」動詞がどうして意志動詞として用いられるのであろうか。「居る」の意志性は、主体が特定の時間に特定の場所に身を置き、かつ一定時間その場所を離れないことを選択し、実行した結果現れたものである。換言すれば、主体に空間移動能力が付与されていることに帰因する。植物が生まれて死滅するまでその場所を動かないのは意志によるものではない。空間移動能力の欠如による。

4-8. 受益・受動を表わす動詞

「もらう」「いただく」「授かる」「教わる」「儲かる」「助かる」など、受益を表す動詞は原則として全て無意志動詞であるが、「もらう」「いただく」は「誰もいないから、パンフレット、黙ってもらって行こう。」「すみません、この案内書いただきます。」のような場合は例外的に意志動詞の用法となる。受動を表わす「受ける」「こうむる」も原則として無意志動詞であるが、「試験を受ける」の用法では意志動詞である。同じく受動を表わす「浴びる」は「水/シャワーを浴びる。」の用法では意志動詞、「非難/放射能を浴びる。」の用法では無意志動詞となる。

4-9. 主体変化を表わす動詞

このグループの代表的な動詞は「なる」である。「～く/に/となる」の形で「大きく/やさしくなる」「医者/教師/社長/病気/元気になる」「政治家/第一人者/最後となる」など、数多く使用される。原則として無意志動詞であるが、「それじゃ、私が掃除当番になります。」のように、自分の意志で選択できる場合は例外的に意志動詞の用法となる。この種の動詞としては他に、「老ける」「若返る」「太る」「やせる」「生まれる」「死ぬ」「成長する」「上達する」(無意志動詞)、「結婚する」「就職する」「自殺する」(意志動詞)等がある。「成長する」は持続的变化を表わすが一応このグループに入れておく。「自殺する」は厳密に言えば、「死」が成立・実現する瞬間において、主体の意志は消滅しているわけだが、「死」へと向かう決定的で不可逆的な方法を意志的に選択し、実行するという意味において意志動詞と認める。

5. 動物の動作の意志性

意志動詞を、これまで「人(もしくは動物)の行う動作・作用」と規定してきたが、実際に例文として検討したものは全て人主体の場合であったし、判定の基準も人主体の場合にのみ該当するものであった。この辺りで動物が主体となるケースを考えてみなければならない。

そこでまず、動物のみが主体となりうる動作動詞を検討してみよう。この種の動詞は非常に限られている。一般的に用いられているのは「吠える」「いななく」「さえずる」「はばたく」「とぐろをまく」くらいである。これらの動作を我々は意志の発現と理解しているだろうか。恐らく、単なる習慣ないしは生理的作用と見なしているのではなかろうか。但し、「吠えかかる」のよう

に一定の対象に対して激しい動きを見せる場合、我々はその動物の意志を感じる。「とびかかる」「とびつく」「噛みつく」も同様である。我々は、動物に人間なみの理性や意志の存在を想定して観察しているのではなく、むしろ動物の多少の目立った行動の中から、その意志性を垣間見るだけなのである。なお、動物の動作の意志性を明確に表わすために、「とびかかろうとする」「噛みつくろうとした」のように、「～（よ）うとする」の表現を使用したり、或いは「動こうとしない」「食べようとする」の表現を使用したりする。但しこの場合も、「考えようとする」「覚えようとする」のように、心的作用を表わす動詞は使えない。使えるのは、明確な外的動作の動詞だけである。尤も、類人猿のような知能の高い動物を日頃相手にしている人達は、より多くの意志的動作・作用を発見しうるであろうがここでは問題としない。

6. 無意志化と意志化

これまでで、動詞を意志動詞と無意志動詞に分ける作業をほぼ終えたが、我々人間の活動全般を見ると、例外的にだが、意志動詞と無意志動詞が扱われた形で用いられるケースに思い当たる。即ち、意志動詞を無意志的に、無意志動詞を意志的に発現させるケースである。前者は我々人間が例えば、何かの理由で注意力を失っていたり、酒に酩酊していたり、居眠り状態に陥っている場合に生じる。刑法でいう心神喪失、心神耗弱の状態もこれに当たる。

- (19) 気がついたらナイフを右手に握っていた。
- (20) いつの間にか彼女の家の前に来ていた。
- (21) うっかりしてパソコンの電気コードを抜いてしまった。
- (22) 思わず前の人を突き飛ばしてしまった。
- (23) かつとなって、男を刺し殺してしまっていた。

ここで用いられている動詞は意志動詞であるが、全て無意志的発動である。そしてこれらの文には決まった形がある。動詞句の前に無意志化表現を誘導する、「気がついたら」「いつの間にか」「思わず」「かつとなって」のような副詞、副詞句が置かれ、動詞の後の文末には「～ていた」「～てしまった」「～てしまっていた」という形式が置かれていることである。このような言語的現象は前稿で述べた「無意志化」に当たる。

これとは逆に無意志動詞を意志的に発現させるケースも見られる。「4-3. 無意識・不注意による動作を表す動詞」等の無意志動詞を意識的に行う場合である。「わざと」という副詞を使用する。文末表現としては、「～て見せる」「～てやる」を用いることもある。これらの現象は前稿で述べた「意志化」に当たる。

- (24) 私はみんなの前でわざと転んだ。
- (25) 演壇を降りる時わざとつまづいた。
- (26) 高山はマーシャンで本間に（わざと）負けてやった。
- (27) 舞台の上で上手に倒れて見せた。

7. 終りに

最後に振り返ってこれまでの検討結果を要約してみよう。まず、主体の意志が、その動作・作用・状態の成立・実現の決定的要因となっている動詞を意志動詞、それ以外を無意志動詞と定義

した。そして、その検証形式として「私は(が)～します/してみます」の意思表明文を提示し、その際、特定の時点・期間の表示が必要であるとした。更には、前稿で得られた「意志動詞－無意志動詞」の客観テスト「～てみる」「やむをえず～」を採用して意志動詞－無意志動詞の分類を行った。かくして日本語の動詞は次のように区分されることになった。先ず初めに、動詞はその表わす動作・作用・状態の主体が人(もしくは動物)であるか否かによって大きく二分される。人(もしくは動物)以外が主体となる動詞(人の身体の一部も人以外と見なす)は無条件に無意志動詞となる。人(もしくは動物)が主体となる場合は意志動詞と無意志動詞に分かれる。この内、通常の動作動詞は原則として意志動詞となる。意志動詞と無意志動詞が混在する(或いは無意志動詞のみが偏在する)のは、主として心的作用を表わす動詞、並びに、先述の4-2. ~4-9. の動詞群、即ち、評価を伴う動詞、無意識・不注意による動作を表わす動詞、生理的動作・作用を表わす動詞、心理的動作を表わす動詞、一般的態度或いは対人態度を示す動詞、状態動詞、受益・受動を表わす動詞、主体変化を表わす動詞の各グループである。このようにして、「意志的動作を表わす動詞=意志動詞」という、従来の枠組みを離れて、新たな「意志動詞－無意志動詞」の分類にたどりついた。とりわけ、「作用の停止」という検討をも追加して、これまで看過されてきた、心的作用を表わす動詞群の中に新たに意志動詞を見出し得た。なお、「意志動詞－無意志動詞」というカテゴリーの外側に、意志動詞の無意志動詞的用法、無意志動詞の意志動詞的用法、即ち、無意志化、意志化という現象が存在することも付記しておかなければならない。

ところで、「意志動詞－無意志動詞」というカテゴリーの必要性に関しては、前稿で述べたように、厳然たる形ではないにしろ、原則的に使用する動詞が意志動詞であるか、無意志動詞であるかによって、成立・不成立が分かれたり、その意味が異なったりする数多くの表現形式があることを挙げれば十分であろう。再度その表現形式を分類して提示しておく。

原則として意志動詞と共起する表現：～う/ようと思う、～(する)つもりだ、～てみる、～ておく、～である(以上二つは他動詞でかつ意志動詞)、～なければならぬ/ねばならない、可能形、～てください、受給表現、～う/ようとする、～なさい、使役形、～ことにする、～(する)ために、～てみせる、～(する)のをやめる、～たがる、「お～する」の謙讓表現等。

「～抜く、きる、通す、直す、損なう」等の複合動詞。

「わざと、敢えて、思い切って、思う存分、強引に、無理やり、やむをえず、恐る恐る」等の副詞類。

原則として無意志動詞と共起する表現：原因・理由の「～て～」の後件部分、条件を表わす「～ば～」の後件部分、条件を表わす「～と～」の後件部分等。

「うっかり(して)、つい、知らず知らず」等の副詞類。

原則として共起する動詞の種類によって意味が分かれる表現：～う/よう、～まい、命令形、～てしまう等。

(付記) 筆者の所属の異動により、前稿は『愛媛大学教養部紀要』、本稿は『愛媛大学教育学部紀要』と、分かれて掲載されることになった。

注

- (1) 「過程の命令」とは、仁田によると、動きの達成・成立そのものではなく、動き達成への過程・企ての遂行・実現を命じることによって、命令の表現として成り立っているものをいう。例えば、「過程の命令」の「落ち着け」が命じるのは、「落ち着く」ことそのものの実現・達成ではなく、「落ち着くようにする」こと、「落ち着くように努める」ことの実行である、としている。

参 考 文 献

- (1) 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』(大修館書店)
 (2) 仁田 義雄 (1988) 意志動詞と無意志動詞『月間言語』17巻5号(大修館書店)
 (3) 仁田 義雄 (1991a) 『日本語のモダリティと人称』(ひつじ書房)
 (4) 仁田 義雄 (1991b) ヴォイスの表現と自己制御性『日本語のヴォイスと他動性』(くろしお出版)
 (5) 宮島 達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』(秀英出版)
 (6) 鈴木 重幸 (1972) 『日本語文法形態論』(むぎ書房)
 (7) 吉川 武時 (1974) 日本語の動詞に関する一考察『日本語学校論集1』(東京外国語大学附属日本語学校)
 (8) 杉本 和之 (1995) 意志動詞と無意志動詞の研究—その1『愛媛大学教養部紀要』第28号
 (9) 杉本 和之 (1996) 「思う」の統語論的、語彙的特徴『中京国文学』第15号(中京大学国文学会)
 (10) 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』(ひつじ書房)
 (11) 森田 良行 (1977, 1980, 1984) 『基礎日本語1, 2, 3』(角川書店)
 (12) 森田 良行 (1996) 『意味分析の方法』(ひつじ書房)
 (13) 柴谷 方良 (1978) 『日本語の分析』(大修館書店)

(1996年9月30日受理)